

高千穂大学・初年次教育の現状 —ゼミ I を中心とする学生サポート—

成田 博
高千穂大学

1. 商学部全学科共通で「ゼミ I」を履修

本日は、本学の初年次教育の中心である「ゼミ I」についてのご紹介と変遷についてお話しをさせていただき、最後に私見を述べさせていただければと思います。

本学は商学部、経営学部、人間科学部の3学部から構成されており、550名の定員、実際には毎年630から640名の学生を受け入れています。本学の初年次教育では、「英語」、「コンピュータ」の二つの科目を必修科目として配置しており、ビジネス系の経営学部と商学部は、これらに加えて「簿記」を必修としています。さらに、全学科共通で「ゼミ I」を履修します。本学は、セメスター制度を導入していますが、「ゼミ I」は通年科目として展開しています。今年、43人の先生方に「ゼミ I」のクラスを担当していただきました。クラス担当の先生は、それぞれ学生のアドバイザーの役目も果たします。また、クラスの人数は最多でも16名となっています。

「ゼミ I」の目標は、学生の「気づき」を喚起することで、「大学へのスムーズな接続」「キャリア意識の醸成」「課題探求型学習」「スタディ・スキルの獲得」という四つの視点を基本構成としています。入学目的が希薄で大学の勉強にまだ慣れていない学生たちがスムーズに大学生活をスタートできるようにすること、そして2年目以降の専門教育のためにさまざまなスキルを身に付けさせることで、学生たち自身の「よし、やろう!」というやる気や気付きを呼び起こすことが大きな目標です。

2. 統一シラバスで課題探求型の授業を展開

具体的な取り組みとしては、まず、大学へのスムーズな接続ということで、「フレッシュャーズ・オリエンテーション」が挙げられます。「ゼミ I」の第1回目として、入学式の翌日から1泊2日で学外オリエンテーションを実施しています。理事長の講話、先輩学生による学生生活の紹介、就職活動体験報告、「ゼミ I」のクラス対抗綱引き大会などを行います。その狙いは、まずは友達をつくって、スムーズな大学生活をスタートしてもらうことにあります。また、本学では生徒一人ひとりにアドバイザーの先生がついて、学生生活を支援する「アドバイザー制度」を導入していますが、このオリエンテーションは、アドバイザーの先生と学生との最初の顔合わせの機会としての役割もあります。

オリエンテーションのほか、統一シラバスによる授業展開も行っています。春学期は、ノートテイキングや文章作成技術といったスタディ・スキルを身に付ける内容が中心です。秋学期は、2年目以降の専門ゼミの準備ということで、グループごとにテーマを決めて研究を行い、その結果をまとめてプレゼンテーションをするという、課題探求型の授業を行

います。共同授業というかたちをとっており、同じコマに割り当てられている「ゼミ I」の複数のクラスを同じ教室に集め、プレゼンテーションを実施します。

そのほかの取り組みとしては、「ガンバレ高千穂 10 分勝負」というものがあります。これは、簡単な国語・算数・理科・社会・英語に関する一般常識問題を、毎回の授業の中で、10 分間の時間をかけて解かせる取り組みです。日々継続して知識を積み重ねていくことの大切さ、継続して努力することの大切さを理解してもらうために行っています。A4 用紙 1 枚程度のもので、先生が解答の解説を行うこともあれば、解答のみ学生に配布することもあります。

「アドバイザー制度」は、先ほど申しましたとおり、生徒 1 人に 1 人のアドバイザーの先生が担当する制度です。オリエンテーションの際に、学生は「学生生活指導記録」に自分の写真を貼り、将来の夢や大学生活を始めるにあたり不安に思っていることなどを書きます。それをアドバイザーの教員が保管をして、生徒の顔と名前を覚えたり、年 2 回の個人面談に活用します。また、アドバイザーの教員は年 2 回の個人面談の記録や、1 年間の総括などもこの「学生生活指導記録」に書き込んでいきます。

アドバイザーの教員は、1 年次は「ゼミ I」の教員が担当しますが、2 年次からは専門ゼミの教員が担当を引き継ぎます。そのときに、この学生のカルテともいえる「学生生活指導記録」も一緒に引き継ぎます。

「高千穂マスタープラン」も、本学の取り組みの一つで、4 年間の学生生活の見取り図のようなものです。新生にとっては、卒業するまでの 4 年間でどのような生活なのか、その全体像が見えないということが課題になっていました。そこで、学習に関すること、就職に関すること、それ以外の行事などをまとめて一覧にし、学生に配布しています。ゼミの担当教員が資料として活用したり、助言のためにも利用します。今年度からは、常に学生が携行している学生手帳に組み込み、副読本として配布しているテキストにも掲載しています。

「学生生活目標管理シート」(ファイル形式)は、学生自身に Semester ごとに自ら目標や計画を立てて、その計画が実行できているかどうかを自分でチェックをしてもらおうという PDCA のためのツールです。担当教員は、面談時に達成度を確認し、助言を行います。

「学生生活指導記録」「高千穂マスタープラン」「学生生活目標管理シート」は、本学独自のポートフォリオ的ツールであり、「ゼミ I」の四つのコンセプトを支える基本的なツールと言えます。

3. 2004 年度に現在の「ゼミ I」の基礎が完成

次に、「ゼミ I」の変遷についてお話しをさせていただきます。2000 年度当時は、「ゼミナール入門」という形をとっていました。それぞれの先生が、それぞれのテーマで授業を行っており、内容的にもそれほど統一されたものではありませんでした。テーマは学生自身に入学時に選んでもらっていたため、人気のあるゼミは学生の応募が集中してしまい、希望のゼミに入れなかった生徒は、大きな不満が残るという状況でした。

この課題を解決するために、それぞれのゼミは自由なテーマで行うが、目標は統一しようということが試みられました。ゼミの内容は教員の裁量で行うが、「問題発見能力」「作文能力」「発表能力」を養成するという目標を統一するということです。しかし、実際は、

毎回の内容は教員によって異なっていたので、実質的な解決にはいたりませんでした。

そこで、2002年度に初めて、全クラス共通の授業目標と授業計画を実施することになりました。共通テキストを導入し、年間数回の共同授業の実施も始めました。また、ゼミは学生が自分で選択するのではなく、大学が自動的にクラス編成を行うように変更しました。そのかわり、所属したゼミによって内容が異なることが無いことを目指しましたが、現実的には教員によって若干違いがありました。

2003年度からは、テキストは複数の候補から各教員が選定することとしました。共同授業を除く各回の授業内容は各担当教員の裁量に任せるが、共通の到達目標を定め、その達成を目指すように求めました。また、キャリア・アセスメントも導入し、その解説もゼミの中で行うようになりました。2004年度に「ガンバレ高千穂 10分勝負」を組み込み、現在の「ゼミ I」の基礎が形成されました。

2005年度には、「学生生活目標管理シート」を組み込み、「ゼミ I プレゼンテーション」を導入、2006年度からは、共同授業で、「ゼミ I プレゼンテーション」を実施することになりました。また、2007年度に、学部混成クラスにしましたが、これは、2010年度からは学部別に戻しています。

また、2007年度までは、「ゼミ I プレゼンテーション」はグループの代表が行っていましたが、全員発表形式に変更。しかしこれも、2010年度からは代表者でプレゼンテーションをするという形に戻しました。2009年度からは、1年間でやるべきことを一覧にした副読本「ガンバレ高千穂キャリア編-」を配布し、授業で活用しています。

2010年度は、2003年度から導入していた「キャリア・アセスメント」に関して、「本当に続ける意味があるのだろうか」という意見が多くあり、一旦休止することにしました。また、目標管理シートをファイルとして学生手帳に組み込むことも、2010年度に行っています。

成果測定項目としては、「フレッシュャーズ・オリエンテーションに対する学生の満足度」「成績不良者・退学者の減少」「大学教育の成果発表の場であるゼミ発表会の参加グループ数の増加」「就職内定率の改善や不就労卒業生の減少」等があります。このうち、ゼミ発表会の参加グループ数の増加や、就職内定率の改善や不就労卒業生の減少に関しては成果が出ています。一方で、退学者の推移に関しては、2007年度から若干増える傾向にあります。

4. 学生自らが取り組む仕組みの構築へ向けて

今後の課題としては、「ゼミ I」にいろいろなものを詰め込みすぎてきたのではないかという意見が多く、それぞれの目標について、的確な方法・ツールを用いられるように、整理する必要があると考えています。また、キャリア教育など、初年次教育以外の教育を含めて、再構築する時期にきているのではないかという意見もあります。さらに、共通テキストの活用や、学生の現状把握をするための ICT の活用なども課題です。そして、多様な学生への対応方法の検討が特に重要視すべき課題であり、個別の学生への指導時間をどのように確保するか、これまで以上に教員の意識共有が必要であるものと考えています。

質保証への取り組みは、「高千穂教育質保証運営委員会(仮)」を設置し、FD 委員長も兼ねて、今回の実行委員長である笹金先生を中心に検討をお願いしています。現在、委員会が進めているのは、コース・科目ごとの到達目標の設定です。科目の到達目標は、態度や

志向性などの評価は難しいため、知識・理解度に限定せざるをえないだろうと考えています。まずはシラバスに到達目標だけを明示し、評価はその次の課題としています。

運用については、学部教授会、教務委員会、連合教授会のほか、自己点検・自己評価委員会などの組織もあり、複数の組織の方向性がバラバラにならないよう、運用形態をどのようにしていくかということ、FD委員会との調整を含め、現在検討しています。

本学は初年次教育が盛んに言われる前から、学生のニーズに基づいた教育を実践しようと模索してきました。例えば、就職活動であいさつなどができない学生が増えれば、「マナー講座」を共同授業の中で取り入れるというようなことを実践してきました。質保証も含め、現場・現実に対応した取り組みを行っていかねば意味がありません。多様化する学生たちにどのように対応できるかというのは、画一的なものとは個別多様なものとのトレードオフを含む資源配分の問題であり、どこの大学にとっても悩ましい問題だと思います。

また、結果を求めすぎることの弊害もあります。大学教育というのは、卒業して1年後、2年後だけではなく、将来の人生でその答えを見つけるというものだと思います。短期的な成果だけを求めるものではありません。継続性を重視し、大学が何ができるかではなく、実際、学生たちに何をやらせているか、そして学生自らがきちんと取り組んでくれるような仕組みをどうつくっていくのかということが、我々に求められている課題だろうと考えています。

高千穂大学・ 初年次教育の現状

—ゼミ I を中心とする学生サポート—



成田 博
(高千穂大学・商学部)

高千穂大学の概要

所在地: 東京都杉並区

学部と規模

- 商学部(1950年～) 230名
 - 経営学部(2001年～) 230名
 - 人間科学部(2007年～) 90名
- 計 550名
※1学年あたりの定員

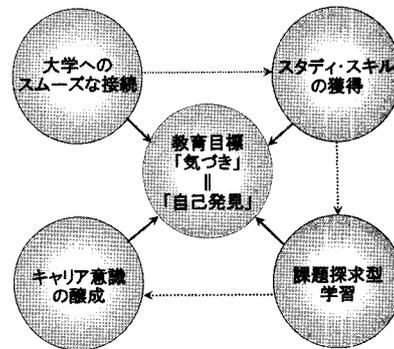
本学における初年次教育の中心の場



- 1年次全学部共通必修科目
(週1コマ-90分通年)
- 43クラス(1クラス15~16名程度)
(全学部共通内容-学部別クラス)
- クラス担当教員=アドバイザー

ゼミ I の目標

学生の「気づき」喚起する



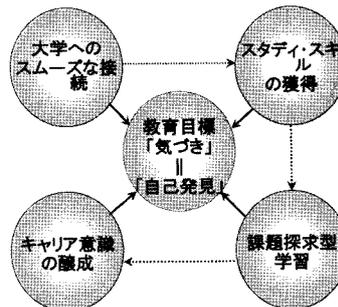
現行のゼミ I の特徴

- 内容は学部依存せず、全クラス共通シラバス
- 共通テキスト(複数のリストから担任が選択)
- 入学直後の学外研修(フレッシュヤーズオリエンテーション)と連動
- 年間2回の共同授業の実施
- 大学による学部別クラス編成

春学期—学生のスタディ・スキルの向上を目的とする授業が中心

秋学期—課題探求型のグループワークが中心

ゼミ I のコンセプトと諸施策



- フレッシュヤーズ・オリエンテーション
- 統一シラバスによる授業展開(共同授業の実施)
- (キャリア・アセスメント)
- 「ガンバレ高千穂10分勝負」
- アドバイザー制度と学生指導記録
- 高千穂マスタープラン
- 学生生活目標管理シート

学年	科目	内容	到達目標	評価方法
1年	基礎学	基礎学(英語・数学・情報)	基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	定期試験
	ゼミ	ゼミ(基礎学)	基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	定期試験
2年	基礎学	基礎学(英語・数学・情報)	基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	定期試験
	ゼミ	ゼミ(基礎学)	基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	定期試験
3年	基礎学	基礎学(英語・数学・情報)	基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	定期試験
	ゼミ	ゼミ(基礎学)	基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	定期試験
4年	基礎学	基礎学(英語・数学・情報)	基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	定期試験
	ゼミ	ゼミ(基礎学)	基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	定期試験

13

学年	1年		2年	
	春学期	秋学期	春学期	秋学期
基礎学	①大学基礎への対応	②大学基礎のスタディ・スキルを身につける(英語・数学・情報)	③専門知識を身につける	④専門知識の習得
	⑤大学基礎のスタディ・スキルを身につける(英語・数学・情報)	⑥基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	⑦専門知識を身につける	⑧専門知識の習得
ゼミ	①基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	②基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	③基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	④基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。
	⑤基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	⑥基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	⑦基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。	⑧基礎学(英語・数学・情報)の基礎知識・技能を習得し、大学での学習に必要となる基礎力を身につける。
課題・授業	①ゼミ(基礎学)	②ゼミ(基礎学)	③ゼミ(基礎学)	④ゼミ(基礎学)
	⑤ゼミ(基礎学)	⑥ゼミ(基礎学)	⑦ゼミ(基礎学)	⑧ゼミ(基礎学)

14

授業内容・施策とコンセプトの対応

①大学へのスムーズな接続

- フレッシュヤーズ・オリエンテーション(学外ガイダンス)
- 学内ガイダンス(教務・学生生活・情報メディアセンター)
- アドバイザー制度⇒個別面談
- ガンバレ高千穂(一般常識問題)
- マスタープランと目標管理シート

②スタディ・スキルの獲得(主に春学期)

- ノートテイキング
- 文章作成指導
- レポートの書き方
- 情報収集の仕方(図書館利用指導)
- 定期試験対策

15

15

③課題探求型学習(主に秋学期)

- テーマに沿った調査
- グループワーク(役割分担)と成果のまとめ
- プレゼンテーション技術の習得と実践(共同授業)

④キャリア意識の醸成

- アドバイザー制度(個別面談・目標管理シート)
- 就職体験報告(フレッシュヤーズ・オリエンテーション時)
- ガンバレ高千穂(一般常識問題)

16

16

ゼミ I の変遷

2000年度まで

- 教員別に「ゼミナール入門」を教育
- 学生が入学時に選択⇒抽選...学生の不満

- 基礎学力の低下
- 入学目的の希薄化
- 学習意欲不足
- 不本意入学



- 成績不良者・留年生
- 不就学者・退学者
- 就職活動での苦戦
- 不就労卒業生

「ゼミ I」を中心とした初年次教育の必要性

17

17

2001年度(経営学部新設)

■ シラバスの記述の共通化

※ただし、同一カリキュラムではなく、6種類のテーマに分けて担当者を配置し学生はテーマを選択

- 「問題発見能力・作文能力・発表能力の向上」
- 毎回の授業内容は担当が自由に決める

⇒根本的に解決しない

18

18

2002年度

- 全クラス共通の授業目標と授業計画
- 共通テキスト
- 入学直後の学外研修(フレッシュヤーズオリエンテーション)の実施
- 年間数回の共同授業の実施(文章作成・マナー)
- 大学側がクラス構成員を決定

前期-共通テキストを用い、文章作成指導を通して文章作成能力、読解力、論理的思考力の向上を目指すことを目的とする実習が主な授業内容

後期-情報収集能力、コミュニケーション能力、レポート作成能力の向上を目標

19

19

2003年度

- テキストは複数の候補から各教員が選定

⇒共同授業を除く各回の授業内容は各担当教員の裁量に任せるが、共通の到達目標を定め、その達成を目指すよう指導する

※ 未だにオリジナルの共通テキストがない

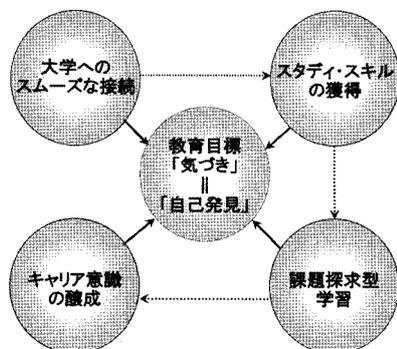
20

20

2004年度

コンセプトと
教育目標の
再確認と明確化

- 授業内容の標準化の推進
- ガンバレ高千穂のゼミⅠへの組込



21

21

2005年度(セメスター制導入)

- 「高千穂マスタープラン」と「学生生活目標管理シート」=学習ポートフォリオ・システムの導入
 - 「ゼミⅠプレゼンテーション」の導入
- ⇒ 秋学期の授業内容の標準化

2006年度

- 共同授業「ゼミⅠプレゼンテーション」の必須化
- ⇒秋学期の授業内容として「プレゼンテーション」の指導を義務化

22

22

2007年度(人間科学部新設)

- 学部混成クラス
- 前期共同授業を「文章作成」→「ノートテイク」へ
- 「ゼミⅠプレゼンテーション」を代表によるPP形式から全員発表形式に変更

2009年度

- 副読本「ガンバレ高千穂-キャリア編-」の配付と活用

23

23

2010年度

- 学部別クラス編成
- 「ゼミⅠプレゼンテーション」を全員発表形式からゼミ単位としての発表へと変更
- 「キャリア・アセスメント」を見直しのために休止
- 目標管理シートをリフィルとして学生手帳に組み込み

24

24

現行のゼミ I への展開

- 2000年頃からの問題意識・検討
- ↓
- 2001年 具体的検討開始
- ↓
- 2002年 スタート
- ↓ コンセプト見直し
- 2004年 改革
- ↓
- 継続的改善

25

25

改革・改善プロセス

- ゼミ I 担当者によるワークショップにより、担当者同士の情報交換と改善に向けた議論を展開する。
 - ゼミ I 担当者ワークショップ、授業評価アンケートを参考に、教務委員会と学長室会議の協働で次年度の改革案を策定する。
 - ゼミ I 担当者定例会議により、次年度改革案を確認する。
 - 連合教授会で承認する。
- 計画P→実行D→評価C→改善Aサイクルの確立

26

26

成果測定項目

- フレッシュヤーズ・オリエンテーションに対する学生の満足度
- 成績不良者・退学者の減少
- 大学教育の成果発表の場であるゼミ発表会の参加グループ数の増加
- 就職内定率の改善や不就労卒業生の減少

27

27

今後の課題

- 目標の整理と適確な方法・ツールの研究
- 新たな枠組みへと再構成すべき段階
- 共通テキストの自主開発
- 学生の現状把握を含むICT活用の検討
- 多様な学生への対応方法の検討
- 学生との個別対応等、指導時間の確保

28

28

質保証への取り組みの現状

- 仮)高千穂教育質保証運営委員会
 - コース・科目ごとの到達目標の設定
 - 科目の到達目標は、原則として知識・理解度を設定
 - シラバスに到達目標を明示
 - 到達目標ごとの評価は今後の課題
 - 科目関連図の作成
- 学部教授会・教務委員会・連合教授会との連携
- FD委員会との調整を含め運用形態を検討

29

29

まとめにかえて

- 個々の大学の現状・ニーズに即した教育方法の模索
- 多様化と画一化のトレードオフ
- 結果を求めすぎる弊害ー短期的な成果測定
- 電子化・ネット化ではなく、継続性を重視
- 何ができるかではなく、何をやらせているか、そして学生自らが何をやっているか

30

30